海外留学

If you can dream it, you can do it.
Men willingly believe what they wish.
The destiny of man is in his own soul.

All men by nature desire knowledge.
Fear always springs from ignorance.
The purpose of life is a life of purpose.

体験談

One today is worth two tomorrow.
Information is not knowledge.
Every day is a new day.

海外留学。皆さんはどう思いますか？　「実際のところよくわからない」と思っている皆さんに向けて、今回は京大の交換留学制度を使って留学した京大生にインタビューしてみました。取材にご協力くださった皆さん、ありがとうございました。

（和三盆）

K.Mさん

農学部地域環境工学科
４回生

留学先：マンチェスター大学（英）
留学時期：２回生１月～３回生６月

FROM K.Mさん

Spice up your life !!
盛り上げていこう!!

――なぜ留学しようと思ったのですか？

高校のときに京大の農学部のパンフレットを見たら交換留学について書かれたページがあったんです。そのとき、単純に「いいなー、行きたいなー」と思いました。自分の中で、京大に受かったら次は交換留学に行く、という一つの決まった道筋みたいなものができましたね。

――留学先ではどのような勉強をされたんですか？

基本的には自分の専門科目の勉強をしていましたね。僕は大気物理学や物質循環の授業を取りました。

――授業の様子は日本とは違いました？

理系科目はあんまり変わらなかったです。先生が板書してそれをノートに書いたりとか。日本と一緒で理系はあんまり学生同士のつながりが無くて、それがちょっとさびしかったですね。

でも、コミュニティ作りの授業なんかだと、既に仲のいいグループができちゃってて、留学生として後から来てその中に飛び込んでいくのが大変でした。

――留学して初めて感じたことはありましたか？

英語ができるだけじゃだめなんだなと感じました。世界は英語が中心ですけど、日本人はバックグラウンドが日本語なんでスタートから後れをとっているんですね。欧米の人と対等になろうと思ったら英語と＋αの努力が必要です。

日本で英語が得意なのは強みになると思うんですけど、一歩外へ出ればそれはネイティブより英語ができない、日本語ができるだけの人になっちゃうんです。だから、英語がネイティブに劣る分、自分の強みを作るためにも専門科目はすごく大切です。僕は向こうで大気物理の授業を取って、日本がその分野で結構がんばっているということに気づきました。そういうこともあって僕も大気物理を勉強して、その分野をけん引できるようになりたいと思うようになりました。

英語ができるっていうのは、グリコについているおもちゃみたいなものだと思います。ついているのが普通だけど、それ単体だと大したものじゃなくて、そこから何ができるのかが問われるんです。

――留学を考えている京大生にメッセージをお願いします。

海外で起こりうるトラブルって予想できるものと予想できないものがあるんですよ。予想できるのは友達ができないとかごはんがまずいとか。でも留学でよく起こるのは予想できないトラブルで、そっちの方がきついんですよ。僕も最初イギリスに着いたとき、寮に入れてもらえなくて、真夜中に雪が降ってる中でイギリス人に頼み込んだことがありました。あのときは本当に困りましたね。

でも予想できないトラブルを経験するからこそ留学は価値があって、トラブルを歓迎する姿勢の方がいいと思います。英語に “Spice up” っていう言葉があって、辛くするって意味でもあるんですけど、盛り上げるって意味もあるんです。留学することは大学生活のメインじゃなくてスパイスだと思うので、スパイスを加えて盛り上げていけばいいと思います。英語ができないからって悩む人もいるけど、住んでみればなんとかなるので、それよりはトラブルを経験して自分の人生を盛り上げていけばいいと思います。

（理・２　ねおん）
（俺も新歓されたい；編）

はみだしすてーじ

新歓で俺の財布が震撼してる
⇒新入生が嬉々として新歓されてる横で俺の財布が危機を迎えてる

K.Nさん

人間環境学研究科
修士１回生

留学先：マギル大学（加）
留学時期：３回生９月～４回生５月

FROM K.Nさん

Bonne chance !
幸運を！

――なぜ留学しようと思ったのですか？

中高時代から欧米の文化に興味があって、大学に入ったら留学したいと思っていました。また、自分の専攻がアメリカ文学ということもあって、専攻に関する知識を深めていくうえで、実際にカナダやアメリカに行って勉強することが助けになると思ったから留学しました。英語力を磨きたかったって理由もあります。

――留学の準備は大変でしたか？

私はぎりぎりまで準備をしなかったので、結構やばかったです（笑）。カナダのケベック州に留学することになって、半年以上の留学だとビザを取らないといけないんですが、ケベックのビザとカナダのビザの両方を取らないといけなかったんです。その手続きが大変でしたね。

あとは、京都大学に留学の応募をするときまでにTOEFLを受けておかなくちゃいけません。私は120点満点のうち100点は取りたかったので、一年で10回ぐらいひたすら受けていましたね。最初のうちはなかなかいい点が取れないので、早めに勉強した方がいいです。

――留学先ではどのような勉強をされたんですか？

「Faculty of Arts」っていう学部に留学したんですけど、主にアメリカ文学やアメリカの文化学、映画学を勉強しました。

向こうで勉強していく中で、欧米の文化を学びに欧米の大学に行くのはいいなって感じました。たとえば映画の授業で、みんなで映画を見て次の授業でその映画について討論するという授業がありました。マリリン・モンローとかが出てくる結構昔の映画を見たんですけど、日本人で自分たちの世代だとそういう映画を見たことある人は少ないですよね。でも向こうの生徒たちは自国の映画に小さい頃から親しんでいるので、発言が一つ一つ面白かったです。アメリカ文化が根付いている中でアメリカ文化を勉強することが、日本でそれを外国のこととして勉強するのとは全く違いましたね。

――向こうでの生活で印象に残った、日本と違うところは何ですか？

向こうでは留学生９人でシェアハウスで暮らしていたんですけど、いろいろな人種の人がいました。アメリカ、インド、ロシア系の人とか。そこではよく人種の話が話題になりました。ある人種の人はすごく差別されてる気がするとか。そういう話を実際にその人種の人から生で聞くのが興味深かったですね。

あと、「日本人は保守的」というステレオタイプのようなことを押し付けられることがありました。海外では私個人としてよりも、まずそういうフィルタを通して見られているって感じましたね。

――留学したことで心情の変化はありましたか？

海外に行くと世界が広がって楽しいですけど、苦労することもいっぱいあって、自分の生活を一から一人で築いていかなくちゃいけない。そういうことを海外でできたっていうことが、帰ってきてからすごく自信になりました。

あとは、留学して勉強したことが大学院で自分がやりたいことにつながりました。もし留学しなかったら院に行かなかったかもしれません。そのへんも自分に大きな影響がありましたね。

（理・２　しゅー）
（遅刻だぁぁぁぁぁぁぁぁ!!；編）

はみだしすてーじ

二度寝カンタービレ
⇒第一楽章Adagio、第二楽章Andante、第三楽章Allegro、第四楽章Presto